

令和7年度第1回新潟県総合教育会議 会議録（概要）

1 日時

令和8年1月19日（月） 午前10時15分から午前11時15分

2 会場

新潟県庁東回廊第一応接室

3 出席者

（1）新潟県総合教育会議構成員

ア 知事 花角 英世

イ 教育委員会

教育長 大田 勇二

委員 小林 元、井口 清太郎、三井田 由香、松山 悦子及び吉田 徳治

（2）説明のために出席した職員

ア 知事部局

総務部 越中部長、榎副部長及び伊花大学・私学振興課長

イ 教育委員会

小川教育次長、明間総務課長及び石山生徒指導課長

4 議題

（1）「新潟県教育の大綱」の策定

「第2期新潟県教育振興基本計画」との一体化について

（2）本県の教育課題

不登校児童生徒への学びの保障について

事務局（大学・私学振興課長及び生徒指導課長）から各議題に係る説明を行った後、意見交換を行った。

意見交換の要旨

【小林委員】

- 教育の大綱については、県教育振興基本計画に沿う形で良い。ただ、人口減少下において、担い手をどう確保していくのかが問題になる。次の不登校の話にも関連するが、スクールカウンセラーやソーシャルワーカーなども、実際に配置可能かどうかを踏まえ、計画立てていく必要がある。
- 不登校については、社会問題としてどのように捉えるかが重要。昔に比べれば、公的な手立ても充実・多重化しているが、この問題について、関係者以外の多くの方々にもっと関心を持ってもらいたい。文科省が、不登校を問題行動ではないとしてから 10 年が経つが、こうした考え方や支援の広がりを継続的に社会へ発信し、理解を促す必要がある。
- また、不登校に限らず、地域・産業界と教育がもっと密接に連携をしていくべきである。産業界も、特に大企業は、経済性だけではなく社会性を重要視するようになってきている。匠の仕事を見せて、不登校児の自立や意欲喚起を図るプログラムを支援する企業もある。
- 加えて、メタバースや生成 AI、フィジカル AI といった新技術も取り入れていく必要がある。

【井口委員】

- 教育の大綱は、同じような計画が複数存在するなら、それを整理・統合していくのは流れとしてあるのではないか。
- 第 1 次教育振興基本計画の策定に関わったとき、私自身の思い入れもあり、「ふるさとへの愛着」に言及していただいた。当時から、人口減少は重要課題であり、人口が何とか減らないよう、児童生徒に地域への愛着を持ってもらうような教育をやってもらいたいという思いだった。引き続き、新潟県の良さを子どもたちにアピールしてほしい。
- 不登校については、「不登校」という言葉が良くないと思っている。児童全体 1 ～ 2 割が経験する現状は、システムの側の問題。要因は様々あると考えられるが、学校に通わずとも学べる環境が整いつつあることに背景にあると思う。
- 学校に行って授業を受けるという学びのスタイルは 100 年前からほとんど変わっていない。いろいろなものが変化している中で、教育に時代に合わせてアップデートしていく部分があって良い。不登校は、多様であることの証左でもあり、不登校を否定的に捉え、駄目なものとする考え方からそろそろ離れても良いのではないか。

【三井田委員】

- 教育の大綱と教育振興基本計画については、法的な性格の違いから両方が必要とされてきた。しかし今回一本化されることで、県民にとって分かりやすく、より伝わりやすい計画になると期待している。
- 不登校については、子どもの総数が減る中でも大幅に増加し、この10年で小学校では7倍、中学校では2.5倍という深刻な状況になっている。将来的に小・中学校でも通信制の仕組みが必要になるのではないかと懸念している。
- 不登校を選択した子どもたちが社会から孤立しないよう、校内教育支援センターや学びの多様化学校、フリースクールなどの選択肢を周知し、支援を途切れさせない体制が求められる。
- また、子どもたちが学校で多様な経験を積み成長する時間は大切である。現在登校している児童生徒が引き続き学校に通えるよう、未然防止にも力を入れる必要がある。そのためには、不登校の増加する時期や学年、地域差など、様々な観点からデータを分析し、新潟県としての特徴を把握する必要がある。
- こうした分析を踏まえ、子どもにとって魅力ある学校づくりを進め、変化の大きい時代においても、子どもたちの声を踏まえた教育活動の充実を図ることが重要。

【松山委員】

- 教育の大綱については、作業の効率化も考えれば、一体化できるものは一体化して良いのではないか。教育の大綱は知事が策定することになっており、知事が判断されるべきものとなるが、自身としては賛成である。
- 不登校離職といって、小学校低学年での子どもが不登校になり、仕事が続けられなくなってしまうこともある。このように、不登校は、親と子の問題にとどまらず、社会全体の問題であり、早急にいろいろな手を打っていなければならない。
- 井口委員もおっしゃったようにシステムの問題であり、そのシステムの根本にあるのが学校である。学校の中で、どのようなことが行われているのかももう少し良く見ていかなければいけないのではないか。校内のルールや運営のあり方が、登校・学習意欲に大きな影響を与えている例も見られる。
- 不登校を、対策しなければならない問題とされると、親は強い負担感を感じる。不登校は不登校として、様々な形で子どもたちが楽しく学び、人とつながっていれば、それでも良いと、もう少し肯定的に受け止めることができないか。
- 先日、イエナプラン教育を実施する妙高市の小学校を見学したが、子どもたちが思い思いに、楽しく自分の勉強している姿が印象的だった。画一的ではない、学校を変えていく一つのモデルになると思う。勉強しなければならないと管理されるのではなく、子どもたち自身が楽しいと思えることや、友達と一緒に過ごしていくことを学んでほしい。

【吉田委員】

- 教育振興基本計画に示される本県教育の基本理念「一人一人を伸ばす教育～一人一人の個性に応じた、質の高い豊かな教育の推進～」や今後の目指すひとつづくりの姿「ふるさとへの愛と誇りを胸に、夢や希望を持って粘り強く挑戦し、未来を切り拓いていける、たくましいひとつづくり」が大好きである。これが基本であり、一段大事なところだと思う。
- 不登校は昔少なかったもので、イレギュラーなもの、悪いものという捉え方になっている。定義上、不登校に位置付けられることはあっても、子どもたちが、友だちと一緒に楽しく過ごし、社会は楽しいというふうに思ってくれることが、教育の一番大切なところ。
- 歌手のAdoのように全然表に出てこなくても、活躍する生き方が存在する。昔の歌手や俳優などは、人に見られて自分を高めていくようなスタイルだったと思うが、現代はそれだけ多様な生き方が認められる時代である。
- これからは、不登校であることを認めるような教育のやり方を作っていくことも必要だと考えている。大人になって自立して生きていけるようになる、どのようなスタイルでも良いから、社会の一員として生きていける教育の方法を作っていくという意味で、不登校に対する考え方を改める必要があるのではないかと考えている。

【太田教育長】

- 不登校の子どもたちは、家から出られない、外出はできるが学校に向かえない、学校には来られるが教室に入れないなど、様子は様々である。各々に応じて学びの場や居場所を用意することが重要である。
- 一方で、今はメタバースやSNSなどで社会と一定程度つながることはできるものの、やはり人と直接会って会話をしたり、交わったりということは大切だと思っている。
- そのため、まずはフリースクールやオルタナティブスクールに通う、その次に校内教育支援センターへ通い、最終的に教室へ戻るといったような段階的な支援が望ましいのではないかと考えている。
- 子ども一人ひとりを中心において、フリースクールや市町村などもっと連携・協働していく仕組みが必要だと考えている。

【花角知事】

- 「ふるさとへの愛着」は、今後も大事にしたい言葉である。新潟県で育つ子どもたちには、是非新潟県への愛着や誇りを持ってもらいたい。
- 不登校を、否定的に受け止めることはもう時代に合わないのではないかと考える。価値観を変えていかなければならない部分はある。一方で、学校で同じ世代の子どもたちが交わりながら、成長していくことの素晴らしさもある。
- 不登校の未然防止に向けて、丁寧に分析することが必要である。一人ひとり事情

は異なるかもしれないものの、もう少し統計的に客観的に整理できるものと考えている。現在の教育現場の問題点の分析にも繋がっていくものではないか。

- イエナプラン教育のように、一人ひとりの学びを尊重する手法はとても参考になるが、必要とされるコストや手間暇がどのようなものか、現在の学校教育の仕組みが作られてきた経過も踏まえ、慎重に検討すべきものである。

【松山委員】

- 資料にもあるとおり、文部科学省が不登校児童に対するアンケートを実施しているが、こうした学校経由のアンケートでは答えにくい部分もあると考えている。アンケートでは拾いきれない要素にも、目を配っていく必要がある。

【小林委員】

- 不登校は、かつて「登校拒否」と呼ばれていた。公的支援は大きく進んでいるが、依然としてこの概念が社会に強く残っている。最終的には、不登校という言葉や統計そのものを必要としない状態、つまり学校への多様な関わり方が当たり前認められる社会が理想ではないか。

【井口委員】

- 子どもたちの学びたいという気持ちは本来とても強いものであるが、従来の学校教育ではうまく伸ばし切れていない。
- 良い学校とは、学力だけが評価される場ではなく、子どもたちが楽しいと感じ、毎日行きたいと思える学校であると思う。主体的で楽しい学びを通じて、自己肯定感を高めることがすごく大事ではないか。

【三井田委員】

- イエナプラン教育の視察では、子どもが自分で今日やることを決め、誰一人としてサボることなく主体的に学んでいる姿が印象的だった。
- 不登校児童が増えていけば、学校教育の存続が懸念される。子どもたちがいきいきとやっていけることを大前提に据え、データに基づいて「変える部分」と「残すべき部分」を良く見極め、改革を進めていくべきだと考えている。

【越中総務部長】

- 議題1の「『新潟県教育の大綱』の策定」、「『第2期新潟県教育振興基本計画』との一体化について」は、事務局の説明のとおり進めさせていただく。
- このたびいただいた意見については、計画に限らず、県の取組みに生かしていく。

以上